

川村学園女子大学研究紀要 第16巻 第2号 1頁—11頁 2005年

イギリスのドラマ教育の考察 (10)

—— ウォーリック大学のドラマ教育と演劇教育 修士プログラムの検討 ——

小 林 由利子*

Drama in Education in England (10)
MA Drama and Theatre Education in The University of Warwick

Yuriko KOBAYASHI

Abstract

This paper analyzes the MA in Drama and Theatre Education at University of Warwick in England. The objective of this paper is to clarify the characteristics of Neelands' drama sessions. He is the director of this program and a leader in Drama Education in the UK and the world. This study found: (1) Neelands uses the drama technique of "Teacher in Role" to create dramatic situation effectively. (2) He structures the drama session to invite participants to go into the dramatic scene without their noticing it. (3) He brings out their insight.

Key Words: Drama Education, Theatre Education, Jonothan Neelands, Teacher in Role

1. はじめに

『川村学園女子大学研究紀要』(2004) 第15巻2号の「イギリスのドラマ教育の考察 (9) —エクセター大学ドラマ学部『応用されたドラマ』プログラムの検討—」¹において、エクセター大学の修士プログラムである「応用されたドラマ (Applied Drama)」の検討をした。その結果、このプログラムが、ドラマ活動そのものを楽しむための活動としてとらえていないことを明らかにした。そして、このプログラムが、コミュニティーや社会や個人などの抱える問

*教授 ドラマ教育・演劇教育

題に着目し、ドラマを通してこれらの問題を解決するための媒介としてドラマと演劇を位置づけていることを明らかにした。いいかえれば、人あるいはモノの何らかの変化を目的にして、媒介としてのドラマと演劇を使用するための理論と技術を獲得するためのプログラムであるといえる。このプログラムが学校教育だけでなく地域社会や社会教育をも視野にいたしたプログラムである。したがって、DIE (Drama in Education), TIE (Theatre in Education), ドラマ教育 (Drama Education), 演劇教育 (Theatre Education) という言葉を使わずに「応用されたドラマ」という修士プログラム名にしたと結論づけた。

今回は、同じイギリスの国立大学の一つであるウォーリック大学教育学部のドラマ教育と演劇教育修士プログラムを取り上げて検討することを通して、このプログラムの主任である Jonothan Neelands² のドラマ活動の特徴を明らかにする。

ウォーリック大学は、1961年に政府によって大学として認可されたコヴェントリー市近郊³の国立大学である。特に、教育学部は、創立当初から研究部門において高い評価を受け現在に至っている。ドラマ教育学科には、世界的に著名な中等教育のドラマ・スペシャリストである Neelands と、初等教育のドラマ・スペシャリストである Joe Winston⁴ というドラマ教育界のリーダーがいる。このことから、ウォーリック大学のドラマ教育と演劇教育プログラムが、特筆すべきプログラムであるといえる。

2. ウォーリック大学の大学院修士課程プログラム「ドラマ教育と演劇教育」

このプログラムの主たる目的は、教育課程におけるドラマ・カリキュラムと演劇カリキュラムを発展させるための基礎的実践と理論を提供することである⁵。さらに、小学校、中学校、高等学校、大学、その他の教育施設、及びコミュニティにおけるドラマと演劇の教育方法を提供することである⁶。

具体的な授業科目は、次の5科目である。第1は、「理論と実践におけるドラマ研究と演劇研究」という授業科目である。この授業は、芸術的コミュニケーションの手段としてドラマと演劇を位置づけ、そのことについて考える授業である。毎週1回の授業で、実践的なワークショップを教員と特別ゲストと学生とが交代でリーダーになり、活動を導くことになる。ワークショップは、ドラマと演劇をどのように使うかという方法論だけでなく、実践的な経験 (a hands-on experience) を学生たちが獲得できるようになっている。実践における理論を明確に学生に持たせようとしているのが、ウォーリック大学のプログラムの特徴であるといえる。

第2は、「ドラマ・カリキュラム」という授業科目である。ドラマを学習媒体と位置づけ⁷,

その可能性について考える授業である。たとえば、どのようにドラマ・カリキュラムを立案し実施するかについて、教授法や学習について、複数の科目についてドラマを媒介にしてどのようにつなげていくかについてなどである⁸。ドラマと演劇とを教育課程の中でどう位置づけるかについて考えているといえる。このような考え方は、イギリスのナショナル・カリキュラムに「ドラマ」と「演劇」という教科が、初等教育にないことによると考える。

第3は、「ドラマと読み書き能力」という授業科目である。この授業は、教育課程における「読み書き能力」とドラマ教育との関係を明らかにすることを目的にしている。このことを強調する理由は、イギリスのナショナル・カリキュラムにおける教科である「英語」に「ドラマ」が含まれてしまったためである。「英語」との関係を強化しなければドラマと演劇とを教育課程の中に残すことができないためである。ウォーリック大学のプログラムにおいては、「英語」を話し、聞き、読み、書くことを教えるためにドラマが必要であることが強調されている⁹。ここにも教育課程の中にドラマと演劇とを位置づけようとする試みが現れている。

第4に、「パフォーマンス理論」という授業科目である。この授業は、一連の教室におけるドラマ活動であるワークショップをどのように演劇作品の上演につなげているかということを実践的に考える授業である¹⁰。ドラマ活動に観客はいないが、演劇作品の上演となると観客は、不可欠な構成要素の一つになる。したがって、ドラマ教育のアプローチとは異なるアプローチが必要になってくる。このことは、教師が最も悩む課題である。なぜならば、観客によって評価されるという恐怖が伴うからである。ドラマと演劇とをつなげていくことは、一直線にはいえないと考える。したがって、教師に緻密な一連のドラマ活動の計画と芸術としての演劇を制作する能力が求められる。

第5は、「研究方法」という授業科目である。この授業は、二つの部分に分けられている。第1部は、「学校やコミュニティーにおいてドラマについて調査するための様々な研究方法を知る」¹¹ことである。第2部は、「学生たち自身の専門領域における研究方法の有効性を示すための予備調査でもあるプロジェクトを計画し実施する」¹²ことである。ここにもウォーリック大学の理論と実践をつなげる試みが顕著に現れているといえる。

このようにウォーリック大学のプログラムは、ドラマ教育に関する理論と実践をつなげ、具体的な経験を通して、理論を背景にした方法論を学生に身につけさせようとしているといえる。このためには、プログラムを担当している教員が、ドラマ活動に関する研究と実践の両方ができなければならない。そういった意味において、長年研究と実践経験を重ねてきているNeelandsとWinstonが指導しているから可能であるプログラムであるともいえる。

3. Neelands のドラマ活動の検討

Neelands は、文学作品をドラマ活動の題材に使うことが多いドラマ・リーダーである。今回の活動は、『Blodin the Beast』という絵本を使った典型的例である。参加者は、大学院生 23 名と著者の合計 24 名である。この活動の概要は以下の通りである。

(1) 合唱的読み

ドラマ・リーダーである Neelands（以下リーダーと呼ぶことにする）は、絵本の最初のページのコピーを配り、最初のページを朗読する。活動の参加者は、円になって座り、今度是一人ひとりが、読んでみる。第 1 に、文の一単語ずつ読む。第 2 に、文の句読点まで読む。第 3 に、参加者が好きなだけ続けて読む。第 4 に、隣に座っている人のために解釈を加えながら読んでみる。一通り読み終えたら、次に、誰でも構わないから、言いたくなった参加者が、文の単語や句を言ったり、唱和したりする。最後に、物語をできるだけ怖く語ってみる。

最初の 1 ページを様々な仕方で読むことを通して、参加者がこの物語に親しみ、物語の世界に徐々に入るように仕組まれている。

(2) Blodin の叫び声

リーダーは、Blodin というモンスターが、どのような鳴き声をするか聞き、参加者に実際に鳴いてみるようにいう。鳴き声をつくれなかった参加者に対して、リーダーは、「大地が揺るがされる音は、どのようなものだろうか。」と問いかける。リーダーは、参加者が、全員が音をつくるようにさせる。リーダーは、「もし、あなたが夜になって、今のような音を聞いたら、何をするだろうか。」とってから、全員で一斉につくった音を出して見るようにいう。

参加者に目に見えない Blodin をいうモンスターの音を様々につくることを通して、Blodin を想像させ、リアリティーを持ちながら、参加者に恐怖感を感じさせている。ここでも、リーダーは、参加者を徐々に恐怖を伴った想像世界に入れようとしていることがわかる。参加者が、自分たちのつくり出した音を聞くことによって、ある種の恐怖をつくり出し、それに恐怖を感じるように仕組まれていると考える。

Neelands の活動の特徴は、段々に深まっていく緻密に計画されたプロセスにあるといえる。つまり、ドラマ活動が緻密に構造化されているのである。

(3) モンスターをつくろう

参加者は、6名のグループに分かれて、身体を使って Blodin をつくる。そして、自分が身体化した Blodin の部位についての言葉を考える。たとえば、「巨大なかばのように大きい胴体」、「ライオンのような鬣をもつ頭」などである。そして、グループごとに、Blodin の一部になりながら一人ひとりが、自分のつくった言葉を言う。

参加者は、身体と言葉をつかって演じてみる経験をしている。そして、動きと言葉を考え出している。これは、絵本から出発して、独自の物語をつくりはじめている活動といえる。つまり、絵本の一部分を切り取り、そこから独自の場面を展開させているということである。いいかえれば、絵本の流れを再現するのではなく、一場面を発展させながら参加者を劇的場面の中に入り込ませていると考える。

(4) 村人の会話

リーダーは、絵本の2ページ目のコピーを参加者に配る。そして、リーダーは、参加者にじっくり村の絵を見るようにいう。たとえば、「この絵にもとづいて、この村はどんな村だろうか。」、「村の生活について何か考えられますか。」、「どのような気候だろうか。」などである。

リーダーは、参加者に二人組のペアになるようにいう。それぞれのペアは、絵の一部から二人の人物を抜き出して、会話を想像して、演じてみる。そのままの状態でもフリーズして（氷が固まったように動かない状態を維持すること）、それぞれのペアは、リーダーが前を通り過ぎるときに自分たちがつくった会話をする。全ペアが、言い終わったら、参加者は村人になったままで、村の会議をするために集まって、大きな円になって座る。

リーダーは、参加者に絵の中で、気になったり、興味を引かれたりする人物を捜させている。そこから、動きと会話を考えさせている。いいかえれば、参加者が選択した村人について考えさせ、身体化と言語化とをさせているといえる。つまり、村人を通して、人物について洞察する機会を参加者に提供している。

参加者に活動の中で自分の内面を考えさせるようにしむけることが、Neelands の特徴であると考ええる。

(5) うわさ話

参加者は、村人になったままで会議をはじめ。リーダーが、最初に「ぼくは、Blodin が赤ん坊を食べると聞いた。」と隣に座っている人にいう。その人は、隣の人にこのことを伝える。次々に村人が、隣の村人に言葉を伝えていくことを通して、Blodin のうわさを広げてい

く。

リーダーは、村人という役割を演じている。これは、Teacher in Role¹³というドラマ・テクニクである。Neelandsは、この方法を活動の中盤あたりから使う場合が多い。そして、参加者が予期しないときに、リーダーが登場人物になって会話を始める。したがって、参加者は、意外性と同時に新しい場面に遭遇することになる。この方法は、参加者に場面にリアリティーを深め、ある種の恐怖を伴う感情を生起させると考える。この不可思議な瞬間は、Neelandsのドラマ活動の特筆すべき特徴であると考ええる。

(6) 村人の恐怖

リーダーは、「勇気を萎えさせるものを一つあげてみよう。」「何について、最も恐れていますか。」と尋ねる。リーダーは、参加者に歩き回るようにいい、「ストップ」という合図を聞いたら、パートナーを探し、自分の恐怖について語るようにいう。次に、3人のグループになり恐怖についてを語りあう。最後に7人のグループになり恐怖についてを語りあう。

これは、うわさが広がっていくこと活動を通して、参加者が体験している。この経験が、一人ひとりの参加者の恐怖を煽っていくと考える。つまり、知らない間に恐怖が深められているといえる。

(7) 子どもの日記

リーダーは、Teacher in Roleというドラマ・テクニクを使って村の長老になり、参加者全員に静かに円陣になって座るようにいう。長老は、どんなうわさが流れたかについて訝しげに聞く。長老は、村人から、山への避難という意見が出されたら、その困難さを指摘する。また、長老は、村人から Boldin を殺そうという意見が出されたら、その問題点を指摘する。つまり、リーダーは、活動とセリフを通して方向づけているといえる。そして、村の会議は、長老が「Blodin について知る必要がある。」という結論に至らせる。次に、長老は「まず、子どもの日記の4ページは、Blodin が最後に村に来たときの焼け跡から見つけられた。だから、注意深く調査する必要がある。」という。

長老はリーダーに戻り、次のように書かれた大きな紙を参加者に見せる。それには、「1日目、大地が揺れた、そして人々が怖がった。2日目、人々は荷物をまとめて、出発の準備をした。3日目、ある人たちは抵抗しようとして、焼かれて灰にされてしまった。4日目、わたしたちは、奴隷になった。」と書かれている。

参加者は、4つのグループに分かれる。リーダーは、ある日の子どもの物語を書くようにい

う。すべてのグループが書き終えたら、グループ1は1日目、グループ2は2日目、グループ3は3日目、グループ4は4日目に振り分ける。そして、各グループの一人がナレーターになって、各グループで創作した子どもの物語を朗読し、グループのその他の5人は、その場面を演じる。たとえば、物語に登場する物になったり、煙になったり、玄関になったりする。そして、お互いに見せ合う。

Neelands は、演劇の経験があるので、Teacher in Role になったとき、参加者にその場面に入る雰囲気を作り出すことができる。リーダーには、登場した瞬間に、その場の空気が変わるだけの集中力と技術があるといえる。したがって、参加者は突然のできごとに驚きながら、場面に引き込まれてしまう状況が生まれる。その瞬間にいたるまで、リーダーはすでに緻密に活動を計画しているのだから、そのリーダーの意図は参加者に気づかれないように計画されている。そのため、Neelands が、長老という Teacher in Role で登場すると、参加者は、「村人になりましょう。」とリーダーに言われなくても、状況が村人になるようになっていくので、自然に登場人物になってしまう、ということが発生すると考える。Neelands は、Teacher in Role を使って緊張感が高まる、山場に登場しているのではないかと考える。そして、この瞬間は、Neelands によって導かれたプロセスを参加者が辿りながら作り出された山場になっているといえる。したがって、参加者は状況に自然に引き込まれてしまうのではないかと考える。

(8) 生き残った人のホット・シーティング

それぞれのグループは、代表を選ぶ。代表は、円陣の中央の椅子に座る。これらの代表は、Boldin が最後に来た日の村の生き残りの村人になり、それから1年たったある日に他の村の人たちと出会うという状況設定にする。円に座っている村人が、4人の生き残った村人に質問をする。

リーダーは、「たった一つだけの村が残されました。Bloding が近づいてきています。どんな助言（4人の代表に向かって）をしますか。」と尋ねる。

これが、再び村人を演じる導入になっている。ここでも Neelands は、参加者に誰々になりましょう、とはいわない。状況が、登場人物を演じるように仕組まれているからである。参加者は、リーダーに導かれながら、登場人物になったり、参加者にもどったりすることになる。その出入りが、徐々に自由になると同時に、参加者のドラマへのかかわりが深められていくと考える、つまり、ドラマ活動が、核心に向かって、推理小説を辿るように構成されていると考える。

(9) 議論

リーダーは、長老になって村人を集め、会議を始める。長老は、「モンスターが村にやって来たとき、どうするかを決めなければならない。ここに留まるか、山に逃げるか。和平を探るべきか。」という。参加者は、村人として意見をいう。リーダーに導かれながら、参加者である村人たちは、ある程度意見が出たら、これからどうするかについて多数決をする。

多数決で山に逃げることになる。長老は、「山に行くための必要なものは何か、家にもどってもってくるように。実際に持っていけるものでなければならない。」という。長老は、それから、持っていきべきでないものは何か。本だろうか。歴史の記録だろうか。楽器だろうか。」と尋ねる。

長老は、「議論が長引いて深夜になった。それぞれに松明を渡すから、燃やすべきものは、燃やすように。」といい、想像上の松明をそれぞれに渡す。それぞれが、自分が決めた一箇所に火をつけるアクションをする。村を燃やした後で長老は、「山に行って、隠れて、下の村で何が起こるか見ることにしよう。」という。参加者は、村人の役になったまま、部屋の隅を山に見立てて隠れる。

Neelands のリードは、ある種のスピード感があり、状況を変化させながら、緊張感を維持させている。同時に次に何が起きるだろうか、というサスペンスが高まっていくように構成されている。つまり、参加者は活動に深く引き込まれていくように構造化されている。

参加者が、山に隠れたときは、これから先どうなるか、という雰囲気がつくり出されている。参加者は、リアリティーをもって隠れている状況に追い込まれている。ここでつくり出されている緊張感と恐怖感は、現実ではない想像世界であるにもかかわらず、リアリティーをもって参加者に受けとめられている。

(10) 暴かれた Blodin

リーダーは、ナレーターになって登場する。ナレーターは、「日が昇ったとき、人々は、上空から大きな音がするのを聞いた。彼らは、砂煙を見た。そして、彼らは、空でうなるような大きな音がするのを聞いた。期待したものとは違っていた。爆音は続いていた。砂埃の中から、彼らはパッと光る大きな羽のついた大きな金属製の鳥が降り立つのを見た。彼らのような人間が、出てくるのを見た。彼らのような人間であるが、どこか違っていた。」

リーダーは、Blodin から派遣された人物になって登場し、「こんにちは。なんたるひどいことだ。めしゃくちゃだ。火で焼かれたのか。何が起こったのか……（呼びかけるように）誰かいますか。たぶん、どこかで見ているに違いない、そうでしょう。何を恐れているのですか？

(仲間に向かって) メガホンをよこせ。(山に向かって) こんにちは。もし誰か、そこに居るなら、出てきて下さい。わたしたちは、あなたたちを助けにきたのです。わたしたちは、パイプラインを破壊した悪者たちを探しているだけです。あなたたちは、そこに居るあなたたちの助けを必要としています。わたしたちは、あなたたちの家を建て直す助けをします。食べ物もここにあります。あなたたちの誰をここに遣して下さい。話し合しましょう。わたしたちは、あなたたちを傷つけたりしませんから。わたしたちは、Blodin から派遣されてきた者です。ここに来たのは、石油のためだけです。それをあなたたちから譲ってもらいたいです。悪いうわさが流れていますけど、我々はいいい人ですよ。我々は、モンスターではないですよ。あなたたちは、奴隷になんてさせませんからね。必ず食料をあげますからね。あす、また来ますからね。」という。

村人たちは、これからどうするかについて話し合う。リーダーは、Blodin から派遣された人になって登場する。「まだ、そこに隠れているのですか。誰か出てきて、わたしたちと話し合いませんか。洞穴があるのでしょうか。たぶん、攻撃するためにつくられたものでしょう。そこにわたしたちの誰かを送ったら、のどをかき切られるかもしれません。わたしは、空襲の責任をとりたくないですからね。子どももそこにいるでしょう。二次的惨事を起こさせるようなことにさせないで下さい。」という。

登場人物からリーダーにもどり、参加者と行った活動について話し合う¹⁴。

Neelands のドラマ活動は、参加者をぎりぎりの状況まで追い込み、参加者にある緊張感のあるピークポイントを経験させる。この山場の経験は、参加者を内面に向かわせ、自問することを呼び覚ますようになっている。つまり、参加者の洞察を発生させると考える。ここに、Neelands の特徴があると考えられる。

Neelands のドラマ活動は、文学作品の一部分からはじまり、参加者に推理小説を読み解いているようなプロセスを辿らせながら、徐々に深くドラマ活動に入る込ませる手法を用いている。一つひとつの活動が、入念にあらかじめから構造化され、参加者が徐々に山場に向かうように緻密に計画されている。そして、ストーリー・テラーでありファシリテーターである Neelands が、予期しない瞬間に Teacher in Role というテクニックを使って登場人物として出現する。これは、参加者に深いインパクトを与える瞬間でもある。いいかえれば、参加者をドラマ活動に深いレベルに導き入れる瞬間でもあるといえる。同時に参加者にある種の新しい洞察を刺激づける瞬間でもあると考えられる。

このことについては、Neelands の他の活動と比較検討することを通して明確にしていく

い。

4. おわりに

ウォーリック大学教育学部修士プログラムドラマ教育と演劇教育は、教育課程の中にドラマと演劇を媒体として位置づけようとしているといえる。そして、学生たちが、実際に教育現場で教科の中でドラマと演劇を使えるように、理論と実践をつなげながらプログラマムを構成している。そして、このプログラムの主任である Neelands が、文学を題材にして、Teacher in Role というドラマ・テクニクを用いて参加者を活動に深いレベルでかかわらせながら、参加者が自ら洞察していくように導いていることを明らかにした。

今後は、Neelands の他の活動例と比較検討して、参加者が深く活動にかかわり、洞察していく経験のプロセスについてさらに明らかにしていきたい。

註

- 1 拙者，2003，「イギリスのドラマ教育の考察（9）—エクセター大学ドラマ学部『応用されたドラマ』プログラムの検討—」，『川村学園女子大学研究紀要』，第15巻 第1号，pp.157-167.
- 2 (1952～) ウォーリック大学教育学部ドラマ教育と演劇教育の主任である。イギリスのドラマ教育の実践的かつ理論的リーダーでもある。ヨーロッパ諸国をはじめ，北アメリカ，アジア諸国でのドラマ教育のワークショップやセミナーを実施している。
- 3 コヴェントリー市は，イングランドの West Midlands に位置する重工業都市である。第2次世界大戦中は，ドイツ軍により激しい爆撃を受けた都市である。コヴェントリー市立ベルグレード劇団の教育部門として TIE (Theatre in Education) 劇団が，1960年代中ごろに創設されたことでも有名な都市である。
- 4 Neelands が中等教育のドラマ教育を専門にしているのに対して，Winston は，初等教育を専門にしている。Winston も実践も研究も行っている。
- 5 “MA Drama and Theatre Education And Post Graduate Certificate in Drama education”，Institute of Education, University of Warwick, 2002, p.1 参照.
- 6 Ibid, p.1 参照.
- 7 イギリスにおいて，ドラマを学習媒体として明確に位置づけたのは Dorothy Heathcote である。拙者，1995，「イギリスのドラマ教育の考察（1）—Dorothy Heathcote の方法論の検討を通して—」，『川村学園女子大学研究紀要』，第6巻 第2号，pp.123-185 参照.
- 8 “A cross-curricular method” は，イギリスの教育におけるアプローチの仕方が，複数教科にまたがるような場合に使われる方法論である。このことは，日本で実施されている「総合的学習」の方法論に示唆を与える可能性があると考ええる。
- 9 “MA Drama and Theatre Education And Post Graduate Certificate in Drama education”，p.2 参照.

- 10 Ibid, p.2 参照.
- 11 Ibid, p.2.
- 12 Ibid, p.2.
- 13 Heathcote が考案したドラマ・テクニクの一つで, リーダーが活動中に登場人物になる。
- 14 Robert Colby, “Outline of Jonothan Neelands Workshop”, 2002 参照.

参考文献

- Neelands, J. *Beginning drama 11–14*, The Cromwell Press Ltd., 1998.
- Neelands, J. *Making Sense of Drama*, Heinemann Educational Books, 1984.
- Neelands, J & Goode, T. *Structuring Drama Work: A handbook of available forms in theatre and drama*, Cambridge University Press, 1990.
- Winston, J & Tandy M. *Beginning Drama 4–11*, The Cromwell Press Ltd., 2001.